

■増田義一（実業之日本）を創業、世の中に役立つ本づくりをめざして、一代で大出版社にし、多くの人物を支援し続けた。
ますだぎいち
版籍奉還・・・1869＝
明治6年政変 1873＝4歳：
三つの反乱・1876＝7歳：
大久保暗殺・1878＝9歳：
明治14年政変 1881＝12歳：
岩倉具視没・1883＝14歳：
秩父事件・・・1884＝15歳：
内閣発足・・・1885＝16歳：
帝国大学始・1886＝17歳：
国民之友始・1887＝18歳：
帝国憲法発布 1889＝20歳：
帝国議会始・1890＝21歳：
大本教・・・1892＝23歳：
郡司千島探検 1893＝24歳：
日清戦争始・1894＝25歳：
日清戦争終・1895＝26歳：
白馬会・・・1896＝27歳：
八幡製鉄始・1897＝28歳：
子規句歌革新 1898＝29歳：
ピア/国産化・1900＝31歳：
田中正造直訴 1901＝32歳：
教科書疑獄・1902＝33歳：
日比谷公園・1903＝34歳：
日露戦争始・1904＝35歳：
日露戦争終・1905＝36歳：
満鉄発足・・・1906＝37歳：
韓国反日暴動 1907＝38歳：
アヲテ' 創刊・1908＝39歳：
伊藤博文暗殺 1909＝40歳：
大逆事件判決 1911＝42歳：
明治天皇没・1912＝43歳：
第一次大戦始 1914＝45歳：
21ヶ条要求・1915＝46歳：
民本主義・・・1916＝47歳：
ロシア革命・1917＝48歳：
ベル仁条約・1919＝50歳：
大暴落・・・1920＝51歳：
原敬首相暗殺 1921＝52歳：
水平社結成・1922＝53歳：
関東大震災・1923＝54歳：
護憲三派圧勝 1924＝55歳：
治安維持法・1925＝56歳：
金融恐慌・・・1927＝58歳：
世界恐慌・・・1929＝60歳：
海軍軍縮条約 1930＝61歳：
満州事変・・・1931＝62歳：
五一五事件・1932＝63歳：
国際連盟脱退 1933＝64歳：
帝人疑獄事件 1934＝65歳：
芥川直木賞始 1935＝66歳：
日中戦争始・1937＝68歳：
大政翼賛会・1940＝71歳：
日米開戦・・・1941＝72歳：
・・・・・・1942＝73歳：
創価学会検挙 1943＝74歳：
敗戦・・・1945＝76歳：
新憲法公布・1946＝77歳：
新憲法施行・1947＝78歳：
三大事件・・・1949＝80歳：
越後国中頸城郡板倉村戸狩で、豪農小林家出身ながら、増田家再興すべく分家した自作農清四郎の次男に生まれる。母タケは浄土真宗玄興寺住職井上家の娘。幼名は義一郎。兄と姉一人がいた。
この年、印刷会社{秀英舎}が創業。豊原小学校に入学。以後、毎年、最優秀で、将来を嘱望されるも、
普段は温厚な風流人と評判の父は、酒を飲むと一変して、毎日の生活にも事欠くようになったため、
小学校高等科を卒業、西頸城郡下早川村小学校の代用教員となると、早くも全校から敬愛されたように、
母からは、女性関係はじめ厳しく躰けられ、酒色を遠ざける人間に育ち、
高野小学校に転じるが、上京していた兄清三郎が急逝したため、一家を養うべく、
やむを得ず、年齢(数え)18歳と偽り、猛勉強で、初等訓導試験に第一位の成績で合格、
中等訓導試験にも、最年少で合格し、
板倉村の宮嶋小学校次席訓導となるも東の間、父が流行のコレラで急逝し、志遂げるべく上京したが、
母が中風で倒れたため帰郷して、訓導に復帰。教鞭のかたわら、弁論会を開いたり、雑誌を発行、
母が死去して、一人になるや、新聞記者になるべく、訓導を辞して、市島が創立していた改進黨系の高田新聞社に入社。その日に署名記事を書いて評判、自由党の壮士に襲われたり、青年の相談にのるうち、
室孝次郎が第1回衆議院選挙に立候補したのを支援、当選した室に従って上京、書生になるとともに、大隈重信が創立し、郷里の大先輩前島密が校長を務め、市島も教鞭をとる、東京専門学校邦語政治科に入学、佐賀県出身光岡威一郎と親友になり、ともに真面目な態度で、後の大林学者本多精六から認められる。
チフスに罹って日本赤十字病院に入院、すでに嫁いでいた姉の看護も受けて、全快。
懸賞論文応募の件で、大隈重信と初めて会い、一瞬にして惚れ込む。_最優等で卒業し、研究科に進むも、
この年、{秀英舎}が株式会社になる。
*光岡が、講義録を発行したり、通信教育するべく{大日本実業学会}を設立するのに参画する一方、専門学校の先輩高田早苗の引きで、{読売新聞}に入社し経済部記者となり、
「実業界人物評論」を連載、取材を通じて、渋沢栄一、大倉喜八郎ら、財界の名士らの知遇を得て行く間、
{大日本実業学会}から、「金貨本位之日本」を処女出版。_光岡が、日本の名のある経済誌としては3番目に古い{実業之日本}を創刊すると、読売動機のまま、その編集を担当し、講読申し込みが殺到するが、
新渡戸稲造が{大日本実業学会}から「農業発達史」を出版。読売に入社してきた永田新之丞の文才を認め、彼にも{実業之日本}に執筆して貰う。_光岡の結核が進行して滞滞するようになり、
*寛悟して読売を退社。光岡家に大金を贈って、{大日本実業学会}を譲り受け、雑誌部門を独立させて{実業之日本社}を創立し、社長に就任。光岡が死去して以後、全面的に{実業之日本}を背負っていく。
室の斡旋で、岩橋静彦の四女浪江と結婚。台湾総督府技師になった新渡戸が、{実業之日本}に初めて論文「欧米農業の大勢」を寄稿。この間、印刷を委託した{秀英舎}に投資、数年で筆頭株主になる。
_鉄鋼王アンドリュウ・カーネギー著「実業の帝国」を小池靖一訳出版、大ヒットして、飛躍の契機となる。
恩人室が死去し、帰郷。_「読売」での親友石井白露を招聘、{実業之日本}躍進の原動力になる。
日露戦争が起きると、永田を迎えて、「征露戦報」を発刊、増刊号{征露写真画帖}とも、成功するが、
日本海海戦の勇み足の報道で、石井とともに、罰金刑。本社を京橋南紺屋町に移転し披露園遊会。
子ができず、妻の姉の子七郎を養子に。_「日本少年」{婦人世界}を同時創刊し、すぐに先行諸誌に肉薄。
{家庭教育絵ばなし}の発行を引き受ける。_「{実業之日本}創刊十周年記念園遊会」で、大隈重信首相が祝辞。
長男義彦が誕生。_「少女の友」創刊。第一高等学校校長になって、寄稿を再開した新渡戸からの青年への修養論を読むうち、顧問に迎えたく、書簡を送り、自宅を訪ううち、快諾され、以後、親交。
「少女の友」の一回愛読者大会開催。{婦人世界}が出版界初の返品委託制を採用。{家庭教育絵ばなし}を改題した*{幼年の友}で、五大雑誌を発行となり、大出版社の仲間入りするとともに、新渡戸が{実業之日本}の顧問に就任、以後、単行本化した新渡戸の連載とともに、著名作家の本も発行、読者数が飛躍的に増大、
次男清三生まれる。{婦人世界}五周年記念園遊会を開催(招待者は大養毅はじめ約千名)。
新渡戸が編集顧問を辞任し小石川台町を本宅としたのに合わせて、原町の旧新渡戸邸に移住。この頃から、新潟県出身の早大OBの組織{越佐会}の世話役。{秀英舎}の相談役になる。_自著「青年と修養」を出版し、ベストセラー(以後、生涯に16冊)。国民党から推され、前島密の推薦を受けて、衆議院議員に当選するが、三男英男が誕生。高田早苗らと、朝鮮・シベリア経由で、ヨーロッパ視察に向かうが、第一次大戦勃発で、アメリカを回って帰国。_尊敬する大隈重信が首相になって打ち出した政策に賛成できず、議員を辞任。
高橋箒庵の連載「実業和尚一喝録」で、財界人を次々と批判、渋沢栄一、大倉喜八郎らの激怒を買って窮地に陥るも、著者名を明かさないとする筋を通す。早大紛争では中立を守って收拾に一役。
{秀英舎}の取締役。{婦人世界}春季増刊号誌上に、読者投票による日本新三景(三保の松原、大沼公園、耶馬溪)を発表。主筆の石井が急逝、遺族に、現在価で数億円もの弔慰金を贈った上、遺児の面倒までみる。
全国の小学校校長ら10人をアメリカ視察に派遣。{実業之日本}創刊二十周年で、記念講演会を各地で開催、祝賀会では、大隈重信や渋沢栄一が祝辞を述べる。
前島密が死去、数年後に実現する銅像建立に尽力。{小学男生}{小学女生}創刊、
「大国民の根柢」を著作出版、欧米視察等を踏まえて、国民の心構えや態度について訴える。
森嶋外を会長とする臨時国語調査会に、新聞・雑誌代表の委員となり、主査として、常用漢字選定や仮名遣い改訂に尽力する一方、新劇好きで、この頃から一流女優の名が高かった水谷八重子のファンになる。
大隈重信が死去、{実業之日本}大隈侯追悼号を刊行すると、重しがとれて政界復帰をめざし、
新社屋建設中に、関東大震災が起き、仮営業所が焼失するも、被災した紙屋を支援、{講談社}に融通する度量をみせ、「大震災災」を出版することができた{講談社}は、その大ヒットで飛躍することになる。
衆議院議員に再び当選、以後、連続6回当選する間、公私混同せず、選挙上には単身で乗り込む。
早大教授山本忠興の相談にのって、多額の奨学金を拠出、家の貧しかった陸上界の逸材織田幹雄の早大入りを実現するなど、早大への母校愛からの様々な支援。また社員を厚遇、わがままも許して、永田も衆議院議員になったり、講演に呼ばれても謝礼はおろか旅費も断るなどの多さが、のちの業績悪化の原因となる。
国際連盟から帰国した新渡戸を、多くの社員とともに、東京駅に迎え、創業三十周年に、東京朝日新聞社講堂での記念大講演会で、新渡戸とともに、講演。_「{実業之日本}に、創刊時から、壺城生の名で書き、大好評を得てきた「茶前茶後」をまとめて出版し、ベストセラー。
_「{実業之日本社}を株式会社に改組。西勝造による「西式強健術と触手療法」連載が大反響で、
_自著「運命の打開」には、「名士と長寿者」の項を特別に設け、僧侶とくに高僧、学者とくに哲学者らに長寿者の多いことを列挙し、対応するように、{健康時代}創刊、現代まで続く健康ブームの嚆矢となる。
渋沢栄一が死去。{前島記念館}創設にも尽力。_わずかに1か月ではあったが、衆議院副議長に就任。
_恩人新渡戸が死去し、{実業之日本}追悼号を出し、
_朝日新聞社講堂で、新渡戸稲造博士追悼記念講演会を主催して、自らも登壇。
{秀英舎}と{日清印刷}とが合併して発足した_「{大日本印刷}」の初代社長に就任(5年後に退任)。
{新友苑}創刊。早大理工学部教授内藤多仲を紹介されて、専門部工科設置計画を支援し、2年後に実現。
第二次近衛内閣で、大政翼賛会国会の予算委員長を務めた際には、反対党議員からも賞賛される公正さ。
*最後となる自著「青年と心の糧」を著して発行し、'自分より優れた人物を用いる'事業の心得を語る。
二男清三が東シナ海で殉職するも、翌日、大隈講堂で青年の修養に関して講演。
養子七郎が病死。
東京大空襲で社屋が焼失、郷里に近い直江津へ疎開。空襲で家屋が焼失。_敗戦で、政界から引退、疎開先から戻り、新宿区若松町に移住。義彦に託して、_「{実業之日本}社長も退任して、
中風を患い、全社員が創業五十周年の祝賀会を開催してくれるも、公職追放指定。歩行も困難になって、
最期は眠るように_没した。

藤井茂「一代の出版人 増田義一伝」、